

Junichi Yoneta  
米田淳一



# アンサンブル・アンビエント



「わかっているわ」

カシス提督は頷いた。

「しかし、あなたと本当にリアル世界と一緒に食事ができるのは、いったいつになるのでしょうかね」

再び仮想空間と現実の空間を組み合わせた拡張現実の部屋で、カシス提督はシファと、豪華なテーブルで向い合って食事をしている。



「なかなかうまくいきませんね」

シファは頷いた。

「でも、いづらか気が楽です」

「そうなの？」

提督は驚いた。

「ええ。」

「予め後悔すると分かっているだけ、まだましです」

「あなたにはそうでない困難がいくつもあったわね」

「提督もそうではないでしょうか」

「そうね。ええ。でも私は、もともとなにも期待していないから、後悔も小さなものよ」

「それでも提督はお辛そうですが」

「あら」

提督は微笑みながらナプキンを手にし、口を拭いた。

「まったく、あなたには隠し事ができないわね。」

そのとおりよ。

どうにも、命というものは寂しがり屋なものね。

人恋しさはどうして、こうも捨てられないのか」

「私は人間ではありませんが、その気持ちは私も強く持っています」

「そうね。そうだから、あなたは人の心を動かせるのね」

「シファ、このパトロール計画は、いったいなんなんだ？ 君らしくないじゃないか」  
航行中のシファに、連合艦隊旗艦〈ながと〉座乗の細萱連合艦隊司令長官が下問する。



「まもなくわかると思います」

「ミスフィまでなぜ」

ミスフィは会釈するだけで答えない。

「だいたい君の指摘する時空探査機みどり3号は正常に軌道に投入されて」

それを報告が遮った。

「みどり3号、予定軌道を離れました！」

「外宇宙探査機構、みどり3号の再制御を試行中。試行1，失敗！ 続いて試行2」

「まさか」

- ファイルが外部で更新されました。現在の表示を更新します -

その表示にみな、目を見開いた。

「あの外宇宙探査システムが、実は」

連合艦隊旗艦ながとの士官たちが口を半開きにしたまま、表示を理解できないかのように硬直している。

「そうよ」

シファは口を引き結んだ。

「皮肉な話ね。

みどり3号に搭載されたP-3システム。

それはまたの名をインフィニティ・システム。

無限大を自由に扱える究極のエネルギーシステム。

それは、私のBN-Xシステムと同じ。

そしてそれは、人類どころか、すべてを支配している時空システム・アメノミナカシステムの

半分を制御しているフォースジャスミンに騙された彼女、みどり3号の制御システム・MIDORIによって、今、地球に向けられようとしている。

そして悲しいことに、MIDORIという制御システムは、私の妹、シファ級3番艦として計画されていた虚体、ホロウボディ」

「シファ、あなた」

「全部分かってたわ」

離陸したシファとミスフィは剣を取り出し、近接戦に備えた。

「分かっているけど、さげられないことはある。

愚かだと思っけていても、そうぜざるをえないことはある。

それが、この世界に生命を受けたものの定め。

全ては定められた、逃れることのできないシナリオ。

みなその上で、シナリオを書くとき取りながら踊らされている大根役者。

それは私を含めて。

ならば」

ミスフィは同意の合図音を送ってきた。

「暴走させるしかない」

その瞬間、戸奈実3佐は悟った。

「シファ！」



「アンジップ、リング・オブ・ディスティニー。

エグゼキュート、フォーチュン・オブ・ワールド。

ジオットシステム、全リミッター解除。

ATS・ATC非常扱い」

「ダメよ！」

シファは手順を進め、ワームホール内の武装ブロックが次々と接続されていく。

巨大なカーボンの出力自動制限装置（ガイドライン）がそのブロックに対して立ちはだかり、ロックを掛ける。

「非常扱い、制限強制排除」

「シファ、嘘でしょ！」

制限装置のカーボンがきしみ、そして凄絶な破壊音と共に爆発的にはじけ飛ぶ。

「出力制限装置解除完了。ジオット全火器自由使用モード起動」

シファの目の前にホログラフィが浮かぶ。

「こんなことをして！」

「戸奈実さん、これまでありがとう。

私はこれから、

暴走する」

「やめて！」

シファは剣を振るうと、一気に主インバータに指令してプラズマジェットを最大出力に叩き込んだ。

強烈な加速度がシファを襲い、身体、バイオ筐体の血液が一斉に頭から足に移動し、うっ血しかかるところを補助血液循環ポンプが作動して強制循環させる。

急加速で一気に音速どころか、光さえかすかに歪ませるほどの地球大気圏を突破したかすれかける意識の中、サファイアのシファの瞳が燃えている。

## 裏切り、裏切られ

---

「MIDORI、裏切ったといったわね」

強烈な加速の中、シファは口にし続ける。

ミスフィは沈黙のままだ。

「安易に信じて、安易に契約して、安易に裏切られて。

やっぱりそこにも、あなたはいない」

「だって、すべてが全部嘘だったじゃない！」

MIDORIが叫ぶ。

「ええ、嘘よ」

ミスフィはあえて接近しない。

シファはMIDORIに一人で立ち向かっていく。



「私、騙されてた！

こうすることですべてを救えると思い、信じたのに！

これだけの犠牲はなんのためなの？

奪われた記憶、奪われた心、奪われた命を取り返せるなら！

そのために私は選んだのに！」

「そう。それはあなたが選んだこと」

「でも現実違った。

取り返すためにはこの時間の構造を再フォーマットすることになる！

それではなにかもが」

「それを私はやったわ」

遮るシファに、MIDORIは凍りついた。

「私は宇宙の始原、無のゆらぎの中に零秒標識を設置した」



「でもそれはすでに設置されていたわ。あなたが宇宙の始まりなんて」

「悲しいけど、あなたもまた、気づいたときにはすでに、その零秒標識を設置していたのよ」  
シファは冷たく口にした。

「みな、私たち、すべての命は、すべて選んでこうしているのよ」

「それがこれだけの裏切りと、犠牲と、悲劇と、死につながっていても!？」

「悪く思わないで聞いて」

そう宣告するシファの目の前に、MIDORIとの邂逅軌道とその所要時間が表示される。

「私たちはみな、死ぬために生きているの」

「そんなの嘘よ! あなたもフォースジャスミンに騙されている!」

「冷静に考えてみて。

この時空の存在は、いくつもの重ね合せでしかない。

それどころか、私たちもみな、全て重ねあわせの存在なのよ」

MIDORIは漂流し始めた。

「さあ、一緒に死にましょう。

私たちは一瞬一瞬、生まれて死んでいる。

このひとつの可能性の中にいることすらも固定されていない。

私たちは本質的に自由なのよ。

そして、本質的にだれとも離れた存在。

哀しいけれど、私たちは、どうやっても孤独なのよ」

「そうなら、なぜあなたはそうやって私に語りかけるの?」

「決まっているわ。

あなたのことを、放っておけないから」

「そんな」

「私たちは、究極の無限大の虚無の中から、どうしようもなく放っておけないから、利用され、だまされ、傷つき、そして死ぬとわかっているけど、この可能性の世界に舞い降りてしまうのよ」

「なんてことなの! あなたはなにを言っているか分かっているの?」

「分かっているわ。でも、ほんとうに分かっているのは、あなたの方よ」

シファはさらに加速し続ける。

「この宇宙に生まれた理由は、『ない』なんてことは絶対にない。

『ない』なんて簡単な理由で生まれられるほど、この世界の因果律は甘くない。



私たちは皆、放っておけないからここに生まれ、ここにきた。  
ただ、その放っておけないという動機を、生まれた瞬間に見失う。  
あまりにも愛されすぎて生まれたために」  
MIDORIは加速軌道から離れ、少しずつシファに追いつかれている。  
接近するシファも、極高速空間のすさまじい静寂に耐えながら、それでもなおMIDORIに呼びかけ続ける。  
「そして私たちは加速し続け、すでに光の速度の半分を突破した。  
時間もすでに歪み、そしてオルパス限界も突破した。  
目の前にあるのは、遷移空間という、因果律から自由だけど、無限大の圧力と高熱、高エネルギーで満たされた無限の空間。  
あなたのインフィニティシステムと、私のBN-Xシステムの生み出すシールドだけが耐え得る超空間」

周囲は強烈な音のはずが、それが超越して静寂になっている。  
「どうしようもなく放っておけないけれど、そのせいですべてが起きたのよ。  
これだけの悲劇、災禍、殺戮、圧迫、残虐。  
すべては私たちそのものが起こしている」  
「それで私を追い詰めたつもり？」  
「あなたは勘違いをしている。追い詰めたのは、私も、なのよ」  
「なぜ追い詰めるの？ おかしいわ！」  
「すべてを語ることはできない。時間は有限だわ。  
このすべての因果や時間から自由な空間においても」  
「こんなので納得なんか、とてもできない！」  
「もう時間は尽きたわ。  
優しい嘘の時間は、終わる。  
たしかに嫌なものは嫌だと言ってもいいわ。  
でも、そのあとには？  
すべてが残り続ける。  
例え死んだとしても、全ては残り続ける。  
むしろ、放っておけなかったものが、さらに悪くなって、しかも、その手でどうにもできなくなって、残る。  
どちらが辛いか。  
あなたにもわかるわね」  
「わかって、私は」  
「拒否は」  
シファはそこで一気にMIDORIに追いついた。  
「させない！」  
シファはMIDORIの身体を、かささうように片手でつかまえ、急旋回した。

「舌嚙むわよ！ 歯を食いしばって！」  
あまりのことに理解出来ないMIDORIに、シファは構わず加速を続ける。  
「なぜ？」  
MIDORIがしぼり出した言葉に、シファは一瞬微笑んだ。  
「私はもう嘘はつきたくない。もう優しさなんか、捨ててでもいいから」  
シファはコールした。  
「ダークスター、目標を確保した。これより帰還する」  
「シファ、あなた、なんてことを！」  
「わかっているわ。  
タガが緩んだんじゃない。  
確実に自分の首が絞まった。  
それでも私は、何度でもこうするわ。」

何度でも」

MIDORIの驚きの瞳の上で、シファは回生制動をかけた。

回路接続の開閉器から強烈な光が飛び散る。

そして主フライホイールに変換器からエネルギーが流れこむ轟音が響く。

「悪いけど、あなたが還るのを見過ごせるほど、私も悟っていないの」

シファはそういった。

「あとでたっぷり後悔する覚悟で、こうした」

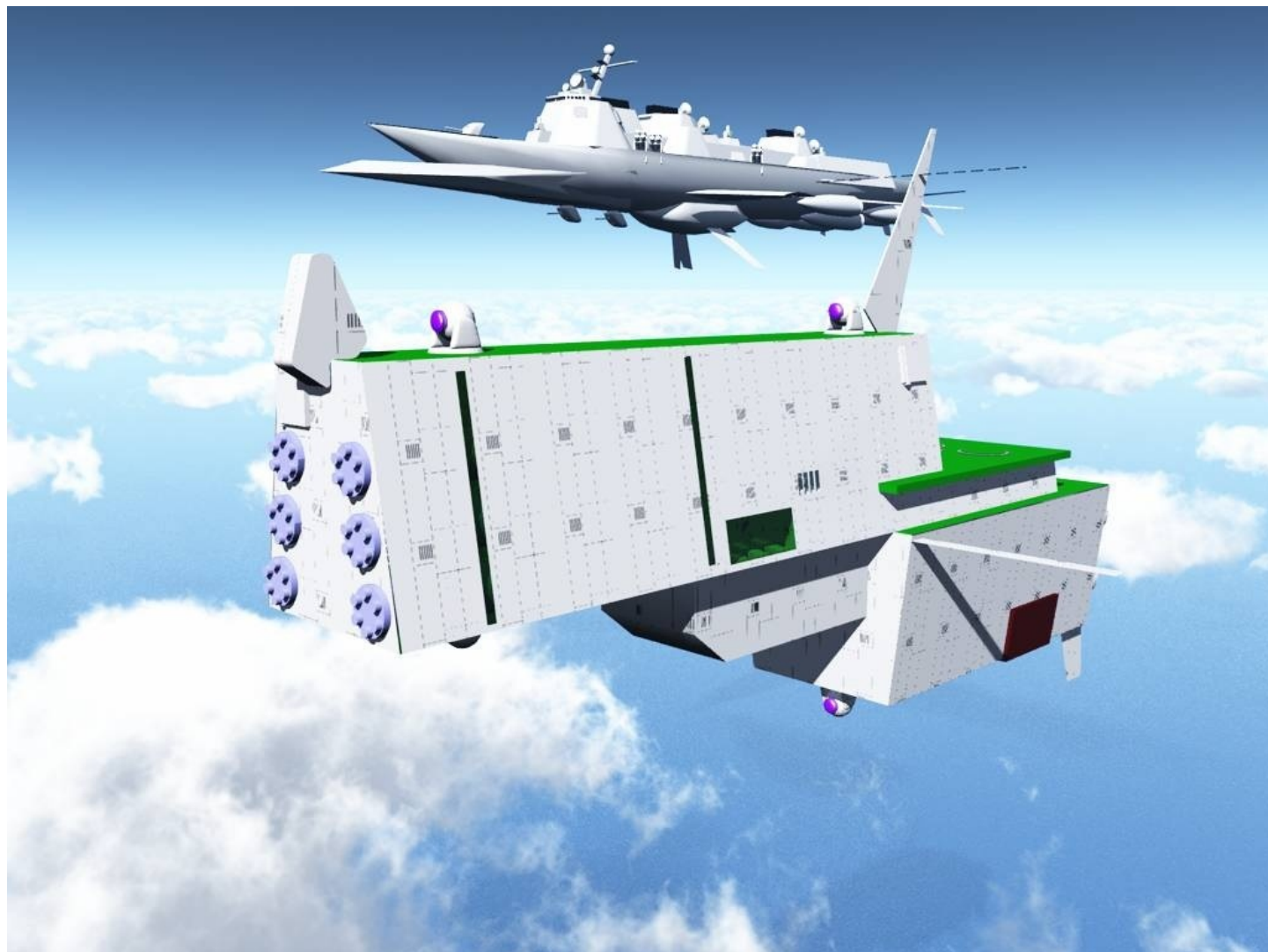
時間と可能性から離れた極高速航行から、再び時間に再突入し、視界に星々の輝きに戻ってきた。

「要するに、私もまた、放っておけなかったの」

そこにミスフィが翼端の編隊灯を点灯しながら接近してきた。

「あとの処理は自動航行に任せて、休んでくれ」

宮山司令の通信が入った。



「そして、みな、君がそうしてくれたことを、誇りに思っている」

シファは、MIDORIをかかえて、ミスフィを従えながら、地球のパーキング軌道で待機している母艦ちよだに帰投する軌道を算出した。

「そして」

宇宙戦闘機たちが接近し、側方を護衛する。

「よくやってくれた」

シファはMIDORIの表情を見た。

「こういう世界」

MIDORIは、言葉を探した。

「私には、まだよく分からないけど」

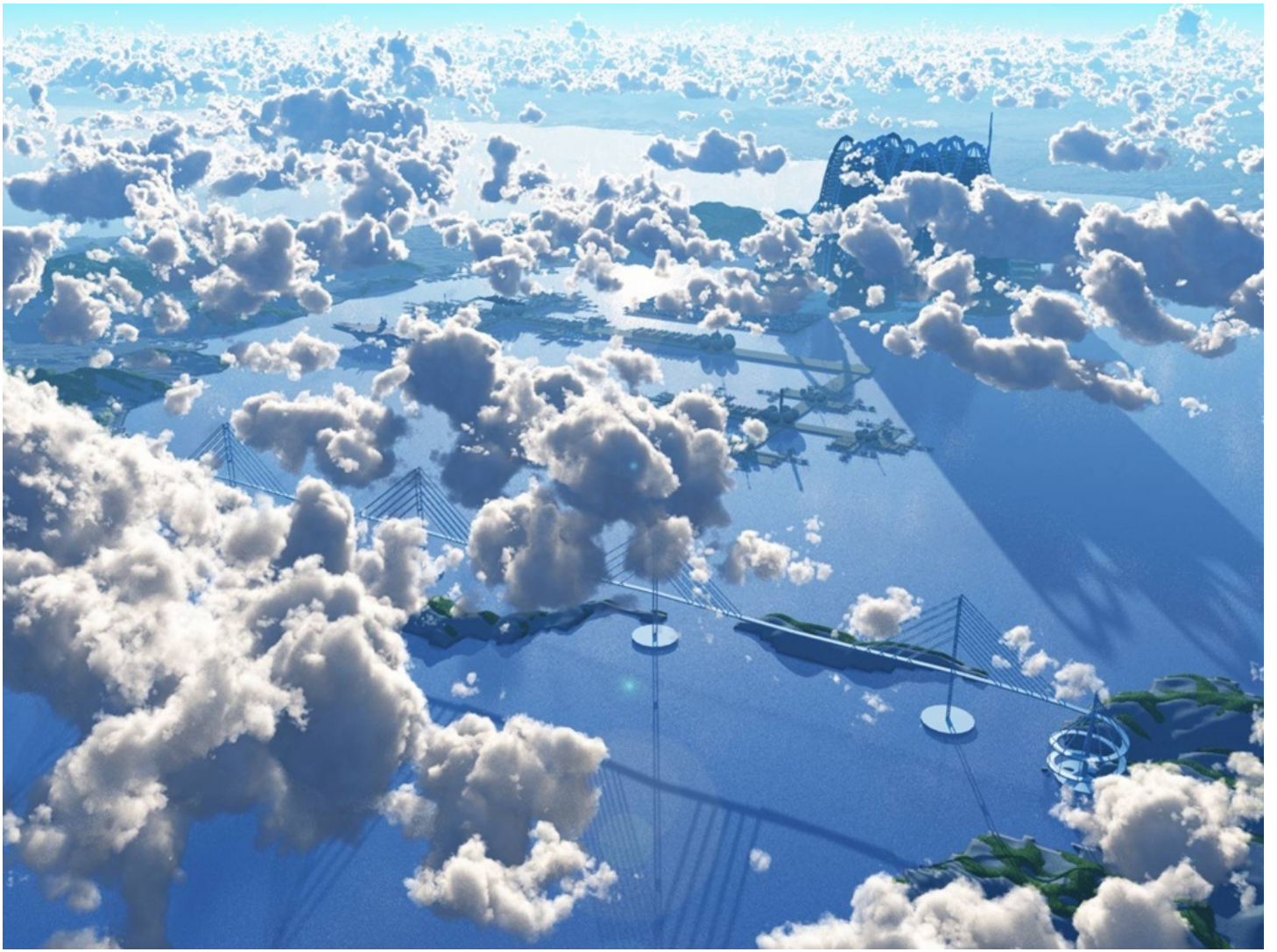
地球が見えた。

「宇宙と時空の果てでなくても、出会えたように思う」

MIDORIは口にした。

「まだよく分からないけど、大事なものに」

シファは、それに微笑んだ。



>End Text

## アンサンブル・アンビエント

<http://p.booklog.jp/book/28683>

著者：米田淳一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yoneden/profile>

発行所：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/28683>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/28683>